

オフライン・オンライン哲学対話の実践報告

Report of offline and online philosophical dialogue

藤平 昌寿^{*1}

Masatoshi FUJIHIRA^{*1}

^{*1} 帝京大学, ^{*2} 放送大学大学院

^{*1}Teikyo University, ^{*2}The School of Graduate Studies, The Open University of Japan

Email: mail@fujipon.com

あらまし：前々稿・前稿と、対話型コミュニケーションについての考察を行った。事例の一つとして取り上げた哲学対話は、通常オフラインで行っているが、新型コロナウイルスの影響により、オンラインで実施するケースも発生している。この度、高校生に対するオフライン・オンライン双方による哲学対話を実施した内容について報告する。

キーワード：対話，哲学，コミュニケーション支援，協調学習，グループ学習

1. はじめに

対話型コミュニケーションは、複数の参加者が、発話などの表出行動により相互に伝達を行いながら、知見を得たり、新たな発想を創出したりするコミュニケーションである。

その一つである哲学対話は、いくつかのルールの下で、参加コミュニティにおける知的安心感を担保しながら進めていく対話型コミュニケーションである。哲学対話の代表的な例でもある、リップマンの「子どものための哲学(Philosophy for Children, P4C)」は、学校教育の現場などにおいて哲学的な対話を行うことにより、子どもたち一人一人が「自分自身で考える力」を身に付け、全体を探究の共同体へと導こうとする活動である。その活動は、文部科学省が示す新学習指導要領での「主体的・対話的で深い学び」に通ずる部分も多く、今後の教育活動への寄与等が期待できる所でもある。

2. 高等学校における哲学対話の概要

筆者は、一般向けや親子・子供向けなどの哲学対話の実施・参加を経験してきたが、このほど、栃木県那珂川町に位置する栃木県立馬頭高等学校ボランティア部の協力を得て、高校生を対象にした継続的な対話を持つ機会を得ることが出来た。

2020年度、全国的な新型コロナウイルスの影響を受け、学校内外において様々な活動を実施している同部にとっても、校外を含めたほとんどの活動を停止せざるを得ない状況に陥っていた。そのような状況下において、逆に「考える」「話す」ことによって学ぶということであれば、活動として継続できるのではないかと、この観点から、本対話を実践することとなった。

対話の形式としては、筆者が学校に出向き、筆者をファシリテーター、部員・顧問等を参加者として、教室での円座形式にて、2020年10月より開始した。以降、12月までの3か月間は、毎月1度、筆者訪問型のオフライン対話を継続してきたが、新型コロナ

ウイルス感染拡大防止の観点により、2021年1月からは筆者が学校を訪問することなく、zoomを利用したオンラインでの対話形式に移行し、月1回のペースは維持している。

部員自体が少数のため、毎回の参加者は概ね5名前後である。また、過疎地に位置する学校で、公共交通環境の影響による部活動時間の制約も受けるため、1回あたりの対話時間は1時間程度に限られる。

哲学対話を行う際のルールとしては、以下の項目を予め提示している。

- ・ 何を言っても良い
- ・ 他人を否定しない、茶化さない
- ・ ただ聞いているだけでも良い
- ・ お互いに問いかけてみる
- ・ 知識ではなく、自分の経験で話す
- ・ 結論が出なくても、意見が変わっても OK!
- ・ 分からなくなってもいい
- ・ 参加者は全員平等
- ・ 小学生にも分かる言葉で話す
- ・ 話せる人は一人ずつ

3. 対話のテーマと進行

初回の対話は、前項のルール説明とお試し対話を実施。以降は、当日あるいは事前に決めたテーマをスタートラインとして対話を展開した。

主なテーマを以下に挙げる。

- ・ フードロスは無くせるか？
- ・ コロナの中、部として何が出来るか？
- ・ 年金って何だろう？
- ・ 僕たちはなぜ働くのか？
- ・ なぜ自分たちは12年間も学校で勉強するのか？
- ・ ……など

オフライン進行の際には、参加者全員が円座に座り、「1つだけあるぬいぐるみを持っている人だけが

話せる（話せる人は一人ずつ）」「次の発言者が出てきた場合は、その発言者にぬいぐるみを渡す（現発言者が次の発言者を指名する）」形式で進行する。発言が止まったり、迷走したりする場合には、ファシリテーターが問いを発したり、今までの発言を整理したりする。

オンラインでの進行になっても、基本的な方法は変えないが、ぬいぐるみを使えない分、発言者の指名のみで進めるなどの変更が生じる他、筆者以外の参加者は学校内の一室内に分散してオンライン接続するという変則型オンラインのため、オフラインの雰囲気をやや引き摺りながらの対話形式でもあった。

4. 対話を通して

対話の中から垣間見える点としては、以下のような例が挙げられる。

- ・ 普段、学校や家庭などで話すことの無い、あるいはほとんど無い話題について、考えるようになった。
- ・ 言語化すること自体が困難だった生徒が、少しずつではあるが、言葉として表現するようになった。
- ・ 未知の世界（将来のことや自分の関与しない世界の出来事など）に対して、漠然と受け取るだけでなく、何かしらを考えながら、物事を見るようになってきた。

前稿で触れた対話に関する諸研究と照らし合わせてみる。

上記の例を土屋(2013)による⁽¹⁾対話の哲学的前進と捉えることが可能かどうかは議論の余地がありそうではあるが、「無知への気づき」を捉える点では、一定の成果は得られていると考えられる。

本間(2005)は、オスカル・ブレニフィエ氏による哲学アトリエでの事例を取り上げており、発言された内容について執拗なまでに確認作業を行うという事例があるが⁽²⁾、ここまでではないにしろ、発言の内容や意図について、更に深く掘り下げる場面は大いにあり、それらが更なる対話へのモチベーションとして繋がっていった場面もあった。

森本(2013)による、自身が進行役を務める哲学カフェから派生したテーマを、別のカフェで掘り下げ開催する例⁽³⁾は、本対話でも多く見受けられ、次のテーマ選定の材料となる事例もあった。

5. まとめ

これまでの対話活動について、参加者にアンケートを取り、自身の振り返りや今後の活動の参考とする予定である。特に、オフライン・オンライン両方での対話を経験することは、コロナ以前にはなかなかできなかったことでもあり、学習意欲や意識への変化については、興味深い所でもある。

引き続き、活動を継続しながら、対話による思考

変化について、考察を進めていきたい。

本稿執筆にあたり、栃木県立馬頭高等学校ボランティア部顧問の小高圭美教諭に多大なる協力をいただいた。ここに感謝申し上げる。

参考文献

- (1) 土屋陽介：子どもの哲学における対話の「哲学的前進」について、立教大学教育学科研究年報、Vol.56, pp77-90, 2013
- (2) 本間直樹：対話を演ずる「子どものための哲学」二つの実践、臨床哲学、Vol.6, pp41-54, 2005
- (3) 森本誠一：公共的対話としての哲学カフェ。Humanitas, pp35-46, 2013